

~Current: 時代の流れあるいは新しい潮流~

かねんと

2019.9.25
No.55

人が輝き、そして組織が輝く健康経営をお手伝い

Q レクシードさんの事業内容をお聞かせ下さい。
鈴木: 社会保険労務士です。主に企業に対しての労務管理ですね。一般的な社労士さん同様、手続き業務はもちろんです。労働者側に対して、何かしら働きかけをすることを基本スタンスとして行っています。僕は、



会社概要
会社名: 社会保険労務士法人レクシード
代表者名: 鈴木教大
住所: 鹿沼市東末広町1940-12
創業: 平成26年2月
従業員数: 7名(女性7名)

労働局、労働基準監督署、年金事務所での勤務経験があり、そこで習得したスキル等を生かし、社内での相談事には大概お答えできます。唯一出来ないのは弁護士業務である代理行為ですね。
Q: 男女生き生き企業としての具体的な取組を教えてください。

鈴木: 女性はライフステージ毎に色々なシチュエーションが変わるのでよね。なのでスタッフにはそれぞれに応じた短時間勤務を認めています。有給休暇は全部使っても構わないし、学校行事で2、3時間だけ使うなど時間帯での取得も可能です。インフルエンザで学級閉鎖の時は、お子さんが感染していなければ会社に連れてきて横で仕事をしても構わない。保育園の子が微熱を出し、預かりを断られた時の為に、別室に机とベビーベッドも用意して、同僚に気を遣う事無く働けるようにしてあるんですよ。
それから、残業はしないっていう社風になっているので皆、定時には一斉に帰ります。女性は家事があるので早く帰りたい。残業する人がいると「何で?」と原因追究から始まるんです。それは生産性の向上にもつながっています。

女性の活躍推進や働き方の見直しに積極的に取り組み、栃木県が進めている「男女生き生き企業」として鹿沼市で唯一認定を受けられた『社会保険労務士法人レクシード』代表 鈴木教大(すずきのりひろ)さんにお話を伺いました。

鹿沼市ホームページから「かねんと」バックナンバーがご覧いただけます。
トップ>福祉・健康>人権・男女共同参画>男女共同参画>男女共同参画情報紙「かねんと」バックナンバー

女性が輝いている団体を紹介しします

NO.9 ~女性と男性が輝く社会を目指して~[鹿沼アテップの会]

鹿沼アテップの会員は現在12名。「男の台所」の支援を中心に新メンバーと共に女性の自立を目指してまなび続けています。

少しずつ、男性の自立が向えます。

妻との話が合うようになり、楽しく会話することが多くなった。

世話になってきた妻が倒れた。今、しっかりこれまでのお礼ができる。



男の台所は各グループ20名まで、合わせて最大80名が所属。それぞれ月1回の定例会と年1回の合同イベント・年3回の市や県のイベントに「アテップの会」と共に参加しています。

<鹿沼アテップ28年の歩み>

1991年、鹿沼市主催の「女性学セミナー」へ参加したメンバーが、より深く男女平等について学ぶため「鹿沼女性行動学研究会」を発足。ライフライン論、ジェンダー論、性別役割分業などを、県の男女共同参画センター(パーティ)や教育センター、宇都宮大学などで学び、足立区女性大学連合会と「生涯学習交流の集い」を実施するなど、精力的に活動を継続。女性が自立するための研修会へ参加した後、男性の活動支援として「男の台所」を立ち上げる。現在は、4グループになった男の台所を中心に、女性が男性を、男性が女性を、互いに理解し、互いに生きやすい未来へ、真の男女共同参画社会を目指して活動しています。これからも、男の台所を通して知り合った男性との交流を図り「男女共同参画社会」を目指して活動を続けます。

編集後記

かねんと編集員になって10年。その間に会った人々は、仲間や指導員の方始め、市役所や研修でお世話になった方々、インタビューさせていただいた方々を合わせると、100人を軽く超えます。この貴重な経験から、なんと多くのご縁を頂いたことでしょうか。たった一回の出会い、たった一言だけの言葉を交わした人もいたかもしれませんが、何より、読んでくださっている市民の皆様も含めまして、関わったすべての人々に感謝とお礼を申し上げます。この情報紙に関わらせていただいて本当に嬉しく思います。このボランティアから得たものは計り知れません。心より本当にありがとうございます。(f)

編集員 福田万里子・高橋和子・太田吉友・佐々木澄江

「かねんと」はボランティア編集員が担当し、作成しています。

オール栃木で、男女共同参画を盛り上げよう!



日本女性会議が今年10月に佐野市で開催されます! 記念講演、シンポジウム、10の分科会に13のエクスカージョン(小旅行)。盛りだくさんの内容と、参加者3日間のべ3千人を超える一大イベント誘致のいきさつや大会にかける思いを、実行委員会副委員長の川久保紀久子さんと、実行委員橋本喜美子さんお二人から聞きました。

日本女性会議とは...国連婦人年の10年を契機に1984年に第1回大会が名古屋市で開催されました。それ以降、全国各地で平等社会の実現の為に開催されており、さの大会は36回目となります。

川久保 何故大会を誘致したかと言うと、多くの女性会議に参加していた橋本さんが「今、私達に必要な事」として、ネットワークさのという女性団体に非常に情熱を持って働きかけてくれたんです。最初は無理だと反対もありましたが、橋本さんの熱意にほだされて勉強や検討を重ね実現しました。



川久保紀久子さん

橋本 きっかけは、市の研修旅行です。女性団体に対する男性の認知度が低くて「男性や一般の方を引き込むイベントをやりたいね」と女性5人で語り合いました。その後、企画書を市長へ提出したところ「女性が活躍することでまちが活気づく」と、話が進んでいったんです。誘致の際驚いたのは、市から市へ直接申し込む事。前回の金沢市へは他市町からも申し込みがあったようですが、行政ではなく女性団体が主体になっているという事で、選ばれました。



橋本喜美子さん

******初めて参加の方にも楽しんでいただける工夫をしています。******

川久保 大会運営には、実行委員、運営委員合わせて56名が関わり、人生百年時代にどんなプランで生きて行けばいいのか、女性だけでなく、老若男女、皆が楽しめる物を目指しました。

橋本 エクスカージョンを充実させて栃木を知ってもらうチャンスにしています。佐野市だけでなく、オール栃木でやるという事で、栃木県全体を巻き込んでPRしてきました。



《お2人の百年時代とは?》

川久保 老後は静かに過ごそうと思っていたのですが、誘われるまま動いていたら、地域のために頑張ることが大切だという意識が出てきました。こういった活動で少しでも次世代の方に道筋が出来れば良いなという思いでやっています。

橋本 当時働いていた足利市で、育休を第1号として利用したのですが、その時、「本当に取る人がいると思わなかった」と揶揄されました。今は遠慮なく取得できる時代になりましたね。こういった活動を通して、人生の目標となる先輩や生涯付き合える友人と出会えて感謝しています。

取材を終えて

お二人の熱い思いと、行動力に感動しました。オール栃木の一員として、私たちも力を発揮できたらと思います

レクシード つづき

Q. そのような取組に至るまでの経緯を教えてください。

鈴木: 20代のころ、人の下で働いていて、過酷な労働環境が凄く嫌だった。自らが興じた会社なら自分で理想が描けるじゃないですか。会社設立当時から誰もが生き生き働ける事をめざしてやってきた結果、集まったスタッフが優秀な女性だったんです。結婚や出産を機に退職し、家庭に入った女性も、働く上での障害を無くしさえすれば能力を発揮できる。有能な女性は、まだまだ埋もれていると思っています。



Q. 取組の成果や効果は

鈴木: 反響としては、あまり意識していないのですが、取り組みをブログで発信しているからか、募集をけなくとも『働きたい』という応募はありますね。今は採用できなくて申し訳ないです。うちのメインは「健康経営優良法人」なんです。2年連

Q. 人や企業の意識が変わるきっかけはなんですか?

鈴木: そうですね。トップの意識次第ではないでしょうか。トップが号令をかけて、あとは言いつたことを守る。それをお手伝いしているのが、我々社労士の仕事なので、特に僕はそこを強くやっています。



続で取得していますが、そのためには色々な取組をし、会社の体制を変えていかないとはいけません。今、新卒の人達は企業がどういう所にどれだけ力を入れてるのか、様々な認定マークを見て企業のステータス性を重視しているんですね。

Q. 最後に、今後の目標や課題がありましたら。

鈴木: 僕は男性スタッフが欲しいと思っています。男性が育児に参加して、女性と同じように1年間の育休取得という実例を作りたいと思っています。1年って全国に無いと思うし、育児の大変さが良くわかるんじゃないでしょうか。うちの会社は実験だと思っています。すよ、先進的なことはどんどんやろうとスタッフにも言っているんです。



取材を終えて

お忙しい中、お時間を頂きありがとうございました。「働き方改革」が社会課題となる中で、先駆けて対応されている鈴木社長。特に素晴らしいと思ったことは、女性のライフステージやキャリアを見据えての人材活用と、クライアントのお手本になりたいという経営姿勢。本当に素晴らしいお話をお聞かせ下さいました。さらなるご活躍を期待申し上げます。

かれんとイチオシ

『おこだでませんように』

作者 くすのきしげのり

久しぶりに絵本を読みました。おもわずタイトルに引かれて手に取った「おこだでませんように」を紹介します。

おこる側と怒られる側の心の内が描かれた作品です。

主人公は小学1年生の男の子。いつも学校や家でおこられてばかり、どうして僕ばかりおこられるの?と、心が揺れていました。

そこで、7月7日の七夕の短冊に「おこだでませんように」とひらがなひとつひとつに思いを込めて描きます。それを見つけた先生は...

読んだ後、男の子の心の痛みが熱くなり、気づく事の大切さを実感しました。

くすのき先生が教師だった頃、短冊を實際目にし、この絵本が誕生したそうです。素敵な絵本に出会いました。

(S)



「おこだでませんように」
作 くすのきしげのり
絵 石井聖岳
小学館